

大杉君の非軍備主義論

延島英一

會つて大杉君が、指ヶ谷町の北風會の席上でこんな事を云つたのをハツキリと覚えてゐる。

『僕は軍人の子で、軍隊教育を受けたものだ。軍隊生活と云ふものに對する反感は人一倍多い。そして青年時代には、無政府主義運動の色々な方法の中でも、特にアンチ・ミリタリズムの運動に一生を捧げたいと考へてゐた。』

これは革命の方法論か何かの講演の中で述べたのだ。

彼は此の彼の一生を捧げる筈であつたアンチ・ミリタリズムに就いては、明治四十一年二月二十日の日本平民新聞に、『非軍備主義運動』と題してハツキリと説明してゐる。此の論文は大體フランスの有名なアンチ・ミリタリスト、ギユスクヴ・エルヴェの運動を紹介したものだ。彼は此の以前にも

明治三十八年『直言』に、エルヴェを始め、各國の有名な社會主義者の軍備に關する議論を譯載した。また三十九年には『光』にフランスの無政府主義新聞ラナルシーから『新兵諸君に與ふ』といふ一文を譯載して投獄された事もある。此の『非軍備主義運動』の一部分は次の如くだ。

敵の急所

『新兵諸君を送る』がやられたさうだね。僕等も『新兵諸君に與ふ』で十六ヶ月も幽し込められた上に、罰金まで二百圓も取られたよ。僕と大脇直壽君とは兎も角も去年の末に出て來たが、山口孤劍君は餘罪で未だ單鴨に居る。日本の非軍備主義運動も、初陣からして中々多事だね。

然しまあ仕方がない。無政府主義だの、暗殺主義だの、總同盟罷工主義だのと、政府や資本家にとつては此の上もない物騒な議論が、公然言論の自由を有つてゐる歐洲の諸

國でさへ、言一度び此の非軍備主義に至れば、遅々然として迫害は勉むる有様なのである。歐洲から來る社會主義や無政府主義の新聞雜誌を見給へ。非軍備主義者は殆んど毎日の様に、到る處に逮捕監禁せられつゝあるぢやないか。先日外國電報にもあつたエルヴェが其の機關雜誌の『社會的戰鬥』の記事の爲に一ヶ年の禁錮を言渡されて、他の署名人が五ヶ年の禁錮の宣告を受けたとか。

何故に政府は斯くも此の非軍備主義の聲に戰慄するのか恐怖するのか。之れは云ふ迄もなく、其の最も急所とする所を刺されるからなのである。政府は迫害をして、そして其の最も痛手とする所を白狀するのである。君ツ、敵の急所は此處だよ、敵の痛手は此處だよ。

非軍備主義

初期の社會主義者或ひは無政府主義者は、其の理想の實現手段として暴動或は策塞に據るの革命を夢みて居た。即ちフランス革命の當時、革命黨が政府の軍隊に對抗する爲に、パリの市街に家屋を破壊して、即座に城塞を造つて闘つた、其の方法を再び襲用する積りでゐた。然るに其の後都市の狹隘な街衢は廣められた、曲折した道路は改正され

た。もはや突差の間に街路に要塞を築く事は全く不可能となつた。加ふるに政府の軍隊、武器は大に整頓完備して、革命黨が如何なる勇氣を以てするも、到底之に敵する事は出来なくなつた

其の上、労働者と資本家との間に闘争が起る。政府は、其の道理の何れにあるに關せず、直に軍隊を送つて資本家なる掠奪者を保護する。そして労働者が少しでも反抗の舉動をすれば、兵士は恰も犬を殺すが如くに之れを射殺する。

於是乎、歐洲の殊にフランスの社會主義者、無政府主義者は考へた。軍隊は平民をして××の地位に置かしむる最良の機關である。××の存在する間、平民の完全なる自由は獲得せられない。そして彼等は決心した。革命の最良の方法は、先づ此の軍隊を×××××に在る。軍備を組成せる兵士は、同じく是れ平民の子である。平民の間に兵士の間に、此の一大事實を教示する爲に、吾々は活潑なる傳道を始めねばならぬ。

斯くして非軍備主義、非軍備主義運動は起つたのだ。

又彼は四十一年六月五日の熊本評論に『防禦虛無主義』と題してスエデンのアンチ・ミリタリスト運動を紹介してゐる

が、其の中であらう云つてゐる。

二種の非軍備主義

「非軍備主義」に二種ある。其の一は兎も角も祖國の防禦といふ事を考ふるもので、其の運動も單に常備軍に代ふるに民兵を以てせんとするに過ぎない。換言すれば愛國的非軍備主義といふ可きものである。他の一は些も祖國に對する觀念を有せず、總ての形式の軍制、即ち常備軍をも又民兵をも、何れをも絶滅せしめんとする者である。換言すれば非愛國的非軍備主義といふ可き者である。之れは丁度社會主義に二種あつて、一は現在の資本家政府を倒して、新に平民政府を建設せんとし、他の一は總ての形式の政府、即ち資本家政府をも又平民政府をも、何れをも絶滅せしめんとするに、甚だよく相似て居る。そして此の前の社會主義は多くの前の非軍備主義を主張し、後の社會主義は多く後の非軍備主義を唱道してゐる。今日普通非軍備主義といふて、政府や資本家の甚だしく恐怖して居る者は、此の後の非軍備主義である。スエデンでは此の後の非軍備主義を稱して防禦虛無主義といふて居る。即ち如何なる軍制を以てしても其の祖國を防禦せざるの謂である。(以下略す)

平素の絶對的非國際戰爭論を撤回して、熱心にドイツ征討論を説いてゐる。

しかし文明の逆戻りは、あながちに、ドイツの勝利からのみ來るのではない。國際戰爭其者が、既に、文明の退歩若しくは少なくとも一時的中止を來たさしめるのである。

そして僕は、クロボトキンのドイツ征討論其者を以て、此の戰爭の影響に成る彼れ自身の退歩だと思つてゐる。此の退歩は、ヨオロツバに於ける各交戰國の、殆んどあらゆる思想家共にも見られる。(以下略す)

彼の此の非軍備主義の主張は、戰爭中クロボトキンに反抗して、純正な無政府主義を守りつゞけたマラテスタや、ロツカアや、シアピロ等の、所謂ロンドン・グルウプ其他のそれと一致して居る。そして亦、此のロンドン・グルウプの連中が、寧ろバクニンの無政府主義の祖述、敷衍、擴充に力を入れてゐる如く、大杉君もバクニンの哲學の中にクロボトキンのそれよりも、より多くの知己を發見してゐた。殊に普佛戰爭に際してのバクニンの主張は彼の注意を非常に惹いた。それは非軍備主義者が故國の危機に際してとるべき態度の好適例なのだ。彼はパンフレット『革命の失敗』の中に書いてゐる。

二

アンチ・ミリタリズム運動に一生を捧げると云ふ考へは單に大杉君の青年時代のみの決心であつたらうか。僕はさう思はない。極端な言論壓迫は彼が赤裸々に之を發表し宣傳することを不可能ならしめた。けれども、此の思想は彼の思想の根柢を成したもので、青年時代の決心は生涯を通じてまげられなかつた。全くそれと無關係の様に書かれたいろんな文章のうちに、僕は此の非軍備主義が其の根柢にハツキリと横はつてゐるのを見た。

前からこの國の無政府主義者も、皆な此の非軍備主義運動に力を入れてゐた。けれども、歐洲大戰は此の無政府主義者の一部の者に其の態度を變更させた。クロボトキン、グラウヴ等は其の適例だ。大杉君は此の態度變更に全然反對であつた。彼は『近代思想』復活號(大正四年十月)に『所謂新軍國主義』なる一文を書いて居る。

『ビョートル・クロボトキンは、今回の戰爭に於て若しあの軍國主義のドイツが勝利を得るやうな事があつたら、世界の文明は正に五十年の逆戻りをしなければならぬと云つて

「實際バクウニンは非常な熱心さで、其の一々の戰報、ドイツの勝報を追ふて行つた。世界大戰の際、聯合國の無政府主義者が、クロボトキンを始め殆んど皆な、ドイツの勝利を以つて世界の文明の退歩であると見做して、極力ドイツ征伐論を主張した如く、バクウニンの友人等も亦、ビスマルクと其の鐵血政策との勝利が、世界の文明の上に、又一般社會主義の上に齎らす不幸を豫見したのであつた。彼れに取つては、自由と平等と博愛との大革命のフランスが、封建主義と軍國主義とのドイツに破滅される事は、即ち反革命の勝利であつたのだ。

が、バクウニンの友人等は、クロボトキンや其の友人等のやうには、此のドイツの災厄をブルジュワの政府と其の軍隊の力とによつて斥けようとはしなかつた。」

彼は續いて、しからばバクウニンは如何なる方法に據らんとしたかを述べてゐる。

『「……………フランスの救ひは其の新しい力は、「此の政府の機關を倒して更に他の政府の機關をそれに代へようとする事ではなく、フランスの各州各コミュニティに最も宗全な發意の自由を與へる事である。即ち現存の國家を解放する

事である。」

「けれども果してバリは此の役目を務める事が出来るだらうか。バクウニンはそれに對しても「否」と答へた。バリは國民的運動を主動し組織するためには、餘りに自分自身の防衛に取りまぎれてゐる。ドイツ軍に包圍されてゐるバリは一大兵營になつて了ふだらう。其の全人口が一つの軍隊になつて了ふだらう。」「が、軍隊は推理しない。主動的及び組織力として働かない。それはたゞ戦ふだけだ。」

「そこで各州はバリの命令も實例も待たずに、自ら任意に蜂起し、任意に組織しなければならぬ。が、こんどは、此の各州の蜂起が果して出来るか。バクウニンは始めて「然り」と答へた。(以下抹殺)」

彼の自由聯合論は常に此の非軍備主義論を伴つてゐた。

無政府主義將軍と云はれるネスロト・マフノも亦此の非軍備主義論者だ。彼は其の革命を擁護し達成するには、自由ソヴェートに基礎を有する發意的なバルチザンを以つてしなければならぬ事を教へた。そして「革命の失敗」の著者である大杉君は非常な興味を持つてマフノ運動を研究してゐた。

彼はある時こんな事を云つた。

「ロシア革命の失敗した重大な原因は、ロシアの殆んどすべてのアナキストやアナルコ・サンチカリストが、ボルシェヴィキに眩惑されて、マフノ運動を援助しなかつた爲だ。」

フランスから歸つて來た彼は、此のマフノ運動の重大さを力説してゐた。僕は彼の歸朝後、一日、「今現にヨオロツバで中心となつて活躍してゐる無政府主義者は、いづれも戦時中クロボトキンに反對した人々らしく見えるが……」と質問した。

「さうだ。そしてヨオロツバ殊にフランスの無政府主義者の最良の分子は戦時中の非戦運動の爲めに死刑にされたり、投獄されたり、戦線から行衛不明にされたりして滅びてしまつた。今この投獄中の者の釋放運動を旺にやつてゐる。」と彼は答へた。

「かう云ふ分子を失つた現在のヨオロツバの労働運動は渾沌時代だ。もう二三年もしなければ、一般の方向がどう云ふ風に向ひつゝあると、ハツキリした事は云へない。」

と彼のつけ足したのを其ま覺えてゐる。

—一九二三・二・一三—

大杉と日本の労働運動

水 沼 辰 夫

×

僕は、よく人から大杉一派だとか、大杉門下だとかいはれる。しかし僕はけつして大杉一派でもなければ、大杉門下でもない。たゞ最も親しい先輩、信頼の出来る友人の一人として、また労働運動の上からでは、嚴正な批評家、親切な助言者として彼に對してゐただけだ。

大杉の日常生活における逸話や、所謂社會主義運動方面のことや、また藝術家としての大杉を描く人はそれぞれ適任者があらう。僕は、彼が日本の労働運動に及ぼした影響の重要な點を少し書くことにする。

×

大正七八年頃の、労働運動勃興期から最近に至るまで、大杉が労働運動に貢献したことは實に大なるものがある。政治運動を排して經濟運動を主張したこと、間接行動を排して直

接行動を鼓吹したこと、就中、労働運動は労働者の自主的運

動でなければならぬことを強調して、知識階級その他の指導者を排斥すべきを主張したことなどは、誰も知つて居ることであるが、更に所謂主義者が、やゝもすれば労働者に對して強ひたがる主義的理想論にまで反對したことは、彼を眞に理解することが出来ないで、たゞ過激な無政府主義者とのみ想像してゐたものに取つては、意外であらう。

勿論、これら大杉の主張は必ずしも彼の獨創ではなかつたらう。が、若い熱心な因襲に囚はれない労働運動者達が、言はんと欲して言ひ得なかつたことを常によく代辯し、労働者が自分の行動を理論化し得なかつた場合にはそれを理論で裏づけて、自主的運動の大勢を馴致するに効果のあつたことは何といつても見逃すわけには行かない。

しかも彼は明かに自己の立場を知つてゐた。労働運動に對

しては、嚴正な批評家であると共に親切的な助言者であつた以上、その境界を踏み越えなかつた。彼のこの態度は終始變らなかつた。自分の主張や意見が、労働者に少しばかり受け入れられると、すぐにいゝ氣になつて指導者ぶる連中とは、正にその選を異にしてゐた。

×

大正七年夏の米騒動によつて、一寸出はなを挫かれた觀のあつた日本の労働運動は、翌八年、國際労働會議の開催に促されて、急激に勃興した。労働組合は續々と組織された。けれどもその多くは何れも「資本と労働の調和」以上に出なかつた。

これら労働運動の主流ともいふべきものは別に、小さな一團をなした労働者の群があつた。それは自分達仲間の「資本と労働の調和」運動に嫌らないで、新しい運動の進路を見出さうとした熱心な若い人達だつた。常に屢々會合して、社會主義や、サンディカリズムや、アナキズムなどについて或は諸先輩の講演を聞き、或は盛んに討論し、研究しつゝあつた。そしてそれを實際運動の上に現はしつゝあつた。

此の新しい傾向を、労働運動の主流たらしめたいと希望

した彼は、同志と共に雑誌「労働運動」を發刊し、自主的精神の鼓吹に努めると同時に、内外の労働運動の状態を忠實に報導し、批判した。此の「労働運動」は時々多少の變化はあつたが、大體現在まで繼續しつゝあることは、皆な知つてゐる通りだ。

「労働運動」發刊の當時は、労働運動の好景氣時代だつたので、後から後からと續々、色々の人によつて労働組合が組織されたが、東京で兎に角組合らしい組合としては、友愛會と信友會とだけであつた。そして友愛會は大體において知識階級の支配の下にあり、信友會は印刷工のみの組合だから、彼は自然信友會に對して好意を持つやうになつた。

大正八年十月、國際労働會議問題に引續いて、信友會が、八時間労働問題で、ゼネラルストライキを決定するや、各方面から多大の援助があつたが、東京、横濱、大阪等の社會主義者が一致して助力されたことゝ、著作家組合が應援されたことは、彼の努力に負ふところが少くなかつた。

×

彼は、大正八年の末から九年三月まで入獄した。出獄してま

もなくチブスに罹り、重態となつて一時危篤を傳へられたが、回復して舊に倍した健康となり、其頃計畫された社會主義同盟の組織に盡力した。

九年の末から十年の前半へかけての彼はボルシェビキと妥協の時代だつた。その態度は曖昧だつた。彼の周圍からは労働者が段々離れて、學生出身の主義者に圍まれるやうになつた。彼はその頃のことを後になつて、「たゞ、最初僕は誤つてボルシェビキとの協同の可能を信じて、それを主張しそれを實行して、そして見事に彼等から背負ひ投げを食はされたといふ僕の愚を明かにして、後に来る人達の戒めにして置けばいゝ……」といつてゐた。ボルシェビキと絶縁後の彼の態度は、以前にもまして鮮明となつた。

×

大正九年五月、日本に始めてメーデーの示威運動が行はれた。そしてそれを機會に東京の各労働組合が聯合して、「労働組合同盟會」を組織した。しかしながら社會主義的色彩の濃い信友會や正進會と、資本主義的氣分を多量に持った友愛會とは、往々意見の衝突を見た。終に翌年五月のメーデー後友愛會側は、「社會主義を奉ずる狂燥過激な組合とは同一の

行動は執れない」といふ聲明をして組合同盟から脱退した。組合同盟會(主として信友、正進)は、友愛會の態度を非難した。大杉がこれに歩調を合して、友愛會の指導者攻撃に力を注いだのはいふまでもない。

組合同盟會側は、一方友愛會と争ひながら、組合組織の完備に努め、「機械労働組合聯合會」を組織して、産業的大聯合組織の先驅をなした。

大正十一年五月、メーデーの示威運動は、再び労働組合提携の機運をつくつた。「労働組合全國的總聯合」の運動は、關東關西相呼應して起された。此の間の大杉の活躍は目覺ましいものであつた。しかしながら、それは「親切的な助言者」の程度を越えなかつたことは勿論だ。その詳しいことを書くのは、今暫く見合せる。

彼は去年の末に、労働組合總聯合問題の論争を半ばにして佛蘭西に行き、歸つて僅に二三ヶ月で憲兵隊に殺された。

僕は、「嚴正な批評家」、「親切的な助言者」としての彼、大杉榮が殺されたことを何よりも残念に思ふ。

大杉榮君を憶ふ

加藤 一夫

×

大杉君と最後に會つたのは、今年の七月二十八日、佛蘭西から歸つて來た大杉君の歡迎會の晩であつた。だがその時また、大杉君の顔を見たと言つた位の程度で、きゝ度いと思つて居た佛蘭西の話などには一言も觸れる事なく、主催者の一人として會の世話ばかりをして居た。もつともその日は、大杉君が一度會つて話したいと言ふので、晝間會ふ約束をしてあつたのだが、僕の方に差支えがあつたために、それも果すことが出來ず、會の終つた後、數人の同志と一緒にあるカツフエで茶を飲んで別れた位のことであつた。それから、その翌日、僕は疲れ果てた不健康な肉體に幾分の精力を回復させるべく伊豆の土肥に立出した。それで、二人の間で相談し度いことも僕が伊豆から歸つて來てからのことにして、その

まゝ別れることになつたのだ。

伊豆に行つて居る間にも、大杉君が轉居したこと、子供が生れてネストルと命名したことなどの通信を受取つただけであつた。僕は八月の二十八日か九日に東京に歸つたが、もつと落ちてからと思つて、大杉君とは一度も會はないで居た。ところが九月一日にあの大地震だ。五日には「自由人社」の人々の差入れに行つて僕も檢束され、七日には、東京退去の命令で僕はそのまゝ東京を去つた。

東京を立たうとして居るところへ、大杉君のところに居た川口君が來たので「大杉は何うか」と訊くと、「地震のお蔭で本も讀めると、金もないのに金口の煙草をふかしながら悠々として居る」と云ふ事であつたので、全然ではないが兎に角僕も安心して立つ事が出來た。

九月の十六日か十七日かだつたと思ふ。僕は太坂朝日に原

稿をもつて行つたが、その時僕と會つた一人の記者は「大杉君がやられたと云ふが本當ですか」と訊いた。しかしそれはよく此邊に傳はつた噂の一つで、當の僕自身さへがやられたと噂されて居た折柄だつたので、僕は何の躊躇もなく「そんな事はありません。兎に角、僕の立つ日までにはピンピンして居たのだから」と答へた。しかし僕はその夜家に歸つて來て何となく不安な思ひに襲はれ出した。と云ふのは、記者も勿論信じては居ないやうだつたが、「そんな電報が來て居るんですけれど」と云つた言葉が、急に僕に疑惑の種を蒔きつけたからであつた。十八日の朝だつたと思ふ。或る重大事件の突發で、戒嚴司令官を初め憲兵司令官その他が交送されたと云ふ號外が出た。愈々變だ、兎に角、何かあつたのに相違ないと思つて居るところへ、その夕方、毎日の記者が訪ねて來て、時事新報の號外を示した。それを見て僕はギョツとした。そこへまた號外が來た。妻がそれをもつて大杉さんが殺されましたと、顔の色をかへて驅け上つて來た。

僕達の驚愕！僕達の感慨！それは僕達以外の誰にも幾分は想像されることであらう。

僕がこゝに居ることは殆んど誰もまだ知つて居ない。従つ

て殆んど誰も訪ねて來ない。僕はひとり書齋に閉ぢこもつて考へさせられた。或るときは悲憤し、或るときはすつかり滅入つてしまひ、或るときはダダ的な氣分になつて獨り酒のみ、或るときは殺されたものによりは殘された子達のために暗涙を催した。——大杉君が子煩悩であつた如く、僕の子煩悩も有名だ。

×

大杉君について、餘り多く僕は知らない。主義や思想や運動について、大杉君としんみりと語り合つたことは僕には殆んどない。しかし僕は、大杉と云ふ男を好いて居た。——もつとも僕は、あの頃からの主義者は大抵みな好きだ。山川均君だけは一度も話したことがないから何とも云へないが、堀、大杉、高島、荒畑、宮島、會つて見ると、みんなあの行動や言論には拘らず、いゝ人間ばかりだ。——ことに、大杉君や宮島君とは一番近い思想をもつて居た。それだけに今度の事件の驚いた感動も大きかつたのは無理もない。

すつと以前から僕は、大杉君と知つて居た。僕が宗教や哲學に凝つて居た時分、僕が文藝の方に足向けかけた時分、そ

の頃からもう僕は杉君を知つて居た。僕等はよく、大石七分君のところで落合つた。恐らくその頃の杉君はもつと精悍な闘士であつたらう。だがそれにも拘らず彼は、僕等の間にあつては一個の藝術家の如き彼であつた。

僕は今、僕が鎌倉の女學校で英語の先生をして居た時分、死んだ野村隼雄と一緒に、鎌倉に轉地して居た杉君を訪ねたときの事を思ひ出す。その頃僕等は、思想的に云つてベルグソン黨であつた。そして杉君はサンディカリストとしてソレルと共にやはりベルグソンの哲學に共鳴して居た。恐らく僕が杉君に、同じやうなテンペラメントを見出したのは此の時分だつたらうと思ふ。

杉君は勿論、彼自身の道に従つて彼の思想と生活とを導いて行つた。僕は僕自身の道に従つて僕の思想と生活とを育て行つた。そして僕達の思想は段々と接近しつゝあつた。杉君がクロボトキンの影響をうけたことは云ふまでもない。しかし彼はクロボトキンのやうな聖者の人格よりも、缺陷の多いバクーニンにより多くの親しみをもつて居た。それは恰度、僕がトルストイの感化を受けたにも拘らず遂に全く彼に親しめなかつたと同様である。

の戦術だと心得て居た運動に、議會政策の如何に無力であるかを示し、労働者は労働者自身の力と運動によつて、労働者自身の世界に向つて進むべきであることを一番さきが一番力強く叫んだのは、杉君であつた。

今日では政治運動の叫びが再びまた日本の社會運動及び労働運動の圈内にあがつたとは云へ、最早、何と云つても此の議會政治の無力を信する念慮は、それ等の政治運動の主張者の間に於てすら消滅したわけではない。

直接行動、暴力肯定、衝動の哲學、之れ等が××の實際的方面、ことに建設的方面にどれだけの力をもつて居るか云ふことについては、今茲に論ずる必要がない。しかし、杉君によつて主張されたかうした思想及び行動は、階級意識の發生や階級闘争の自覺に對つての精神的貢獻は異常であつたのは云ふまでもない。ことに社會主義的思潮の勃興當時に於いては、これ位有力な刺激は決して他に存し得なかつたと云つてよい。

社會主義的思想を鵜呑みにした多くの思想家の言説には、動もすれば甚しく潤ひがなく、乾からびて居て、到底、内的要素を多分にもつた人々の心胸を満足せしめ得ないものが多

杉君はアナキズムの思想を受入れた。けれど彼は遂に正統派のアナキストではなかつた。杉君はやはり個人主義的無政府主義的サンディカリストであつたらう。それは恰度僕がアナキスティックな思想を持ちながら、多分にニヒリステイックな要素をもつて居るのと大差はなからう。そして二人とも衝動の哲學を信じたのも似て居る。

しかし、僕は茲に僕自身について語るつもりはなかつた。また語るべきでない。僕はたゞ、杉君と餘り親密な交際をもたなかつたのに拘らず、彼の死が僕に非常なショックを感じしめたと云ふことを云へばよかつたのだ。

社會運動上、労働運動上、杉君はどんな貢獻をなすことが出来たか。

何よりも第一に考へたいのは、日本の労働者に××的精神と氣力とを鼓吹した事である。組合がたゞ單に、賃銀値上だとか時間短縮位のところで團結して居た時分に比べて、今日の労働者がどんなに××の情熱に燃えて居るだらう。勿論これは杉君の力によつたものだとは決して云はない。何よりも時代がさうさせたのである。しかし議會政策をもつて唯一

い。が、杉君の言説にはさうした缺陷は少なかつた。彼は勿論、宗教や哲學の擁護者ではなかつた。けれど、彼の思想には著しく精神的要素が含まれて居た。杉君も亦、社會主義を器械化から救はうとした一人である。

要するに彼は、科學的普遍や、哲學的抽象には忍耐することの出来ない、人間的要素を多分にもつてゐた一個の自由人であつた。そしてこれは、彼の思想からよりは、彼の生活及び性格から、より多く窺はれる。

×

杉君は贅澤な男だつたと云はれてゐる。自動車に乗るとか、うまいものを食ふとか、汽車の一等に乗るとか、そんな事に對する非難めいた言葉を度々僕はきかされた。しかしそれと同時に僕は、彼はありつたけの金を費ひ、惜しみなく人に與へ、貯蓄なんかは一度だつてやらす、おまけに、始終、本屋から前借りばかりしてゐると云ふことも聞いた。實際、此度始めてわかつたのであるが、彼は一萬五千圓の借金を残してゐるらしい。そしてかう云つたことは、彼を愛すべく親しむべく感ぜしめこそはすれ、非難する氣にはならせない。

彼は、主義者や、運動家は、貧乏でなければならぬとか、節約ばかりしなければならぬとか云つて約束に縛られることに耐え得る男ではなかつたのだ。他の多くの事に於いてもさうであつた如く、かうしたことに於いても彼は全くの我儘ものヤンチャものであつたのだ。

強がりであると共に弱氣であり、剛情であると共に無類の羞かみと親切さを持ち、世間に頓着なくやつてのける無鐵砲さと共に、細心に計畫する男だつたり見え坊だつたり、どんな贅澤でも出来るだけの範圍ではやるが、窮乏の際にはどんな苦しみでも平氣で忍ぶ、かう云つたところは凡て、彼の人間らしさを發揮するものである。

トルストイには非常な矛盾がある。しかしその矛盾を通して一貫せしむるものがある。と云つたやうなことをロマンランが云つたが、大杉君にも、さうした矛盾があるが、その矛盾のあるところに大杉君が在ると云へる。やはり彼は愛すべく親しむべき性格だ。

僕はよく、大杉は芝居をする、人氣取りもうまく、世間をアツと云はせる術も心得てゐると云つたやうな批評を人々か

らきかされた。そして、僕自身も、なる程あの男にはそんな

ところが多分にあると思つた。けれど、それと同時に僕は、彼のその生活ぶりや、行動ぶりに、何處かしら、投げつばなしの、何時どんな事でどんなところで死ぬかもわからないと云つたやうな、だから、太く短くと云つたやうなところを見出してゐた。恐らく彼は自ら進んで火の中にとび込む夏の虫を學ぶやうな人間ではなかつたらう。日本のどんな人間も大概はそんな馬鹿にはなりきれない。日本にはイワンの馬鹿はゐない。彼もやはり日本人の一人として甚しく懶巧であつた。けれど彼は何時でも覺悟の出來てゐる人間であつたやうに僕には思へる。

憲兵隊につれて行かれたとき、恐らく彼はまさかあゝ急にあんな運命を擔はうとは思はなかつたらう。けれど、もしやられても仕方がないと云ふ覺悟はきめてゐたに相違ない。

僕は茲まで、成るべく第三者の立場に立つて彼を追想して來た。けれど、これだけ書くのでも、僕にとつてどんなに苦痛であつたらう。僕は今、その心持ちをはつきりと云ひ表はす事は出来ない。しかし僕はもうこれ位にして止めやう。

同志大杉榮君を弔ふ

——支那の同志から——

大杉榮君は死んだ。東洋無政府主義の先驅大杉榮君は死んだ。萬惡政府の毒手に遭つて死んだ。

看よ、人間はどうだ、世界はどうだ。富者の宴席には無産者の肉が積み上げられ、專制〇〇の行刑場裡には平民の血が沍泥として流れる。幾多の奴隸は工場と田園に鎖がれて勞役を強ひられてゐる。

今は是れ黎明の時である。一線の曙光はすでに東方に陰い雲霧を破つて輝きそめた。奴隸は醒め來り、魔鬼の末日は速かに來らんとしてゐる。而して大杉榮君は即ち闇夜に炬火を打ち振るものであつた。静寂の中に叫喊するものであつた。大杉榮君は死んだ。大杉君が世界無産階級のなすべき事業のために盡したところは永遠に磨滅する能はず、東洋の民衆はまた永遠に大杉君を忘れないであらう。

東洋社會革命史中に二個の最偉大不朽の人物がある。即ち幸徳秋水君と大杉君とである。大杉君一生の仕事は幸徳君に比して更に多い。殉道の事件も幸徳君に比して更に慘酷であつた。願れば三十餘年の貧困、流亡、牢獄の生活、堅固不拔の信仰、死に至るまでも止まなかつた奮闘、我等に暗示する所はこれ何といふ偉大な人格であらうか。赫々たる大日本〇〇の威歴の下に平民革命を高唱し、蠻横の警察と憲兵の監視の中に勞働運動に従事して此の強毅卓絶の態度は、正にこれ我等社會革命の同志が採るべく學ぶべき所である。

今、我等は一人の勇敢なる戦將を前線に喪つた。我等は一個の尊敬すべき同志を滅じた。我等の事業は今將に此の數年ならずして其の發端を待つ時となつた。支那は一人の師復君を失ひ、日本はまた一人の大杉君を失つた。これ東洋民族の厄運のみに止まらず、實に全世界人類の厄運であつた。黑暗の勢力は大地に漫ざり、革命の巨星は相繼いで殞ちた。眞に無限の寂寞たる悲哀を感じしめる。

大杉君は強權に反對するの故に死んだ。自由を愛するの故に死んだ。大杉君死すと雖も彼は却つて生の目的を完成した。彼の鮮血は自由の種子を灌溉した。醜惡なる人類解放の花は、この上に湧然として現はれやうとしてゐるのだ。彼の骨肉は土に填つて革命の基礎となり、空前の大改革大破壊は、その上に爆發しやうとしてゐるのだ。

かつて、クロボトキンがバクウニンを紀念するために述べた所に曰く「親愛なる同志等よ、諸君はバクウニンの後塵を歩み、バクウニンの事業を繼ぐ時、彼がリヨンで裁判せられた時に言つた「腦の中に思想あり、筒の中に彈丸あり」との言を忘れるな。」と。

今、我等大杉君を追悼するに當り、同時にまた此の思想と彈丸とを忘れてはならぬ。

世界の無産階級よ、奮ひ起て！

無産階級萬歳！

平民革命萬歳！

無政府主義萬歳！